あけぼの　2011年4月号　平成23年4月1日号　第56巻4号（毎月1回1日発行）

300円

2011 4 あけぼの

いのちの学び――バーチャル時代の生と死

特集対談 海＝夢と希望に向かって旅立つ人に若林一美×新井　満

命という奇跡津島佑子

「人のいのちの真実」を学ぶ場森　一弘

連載

"ことばの杜"への小道 PartⅡ／子どもの直感、発見、感動、発想、決断力を育てる俳句つくり　お相手・小山正見氏／山根基世

ミステリアスな日々／「異教」とはなにか木崎さと子

活憲とヒューマンライツ（人権）／北アフリカの暴動から見る日本伊藤千尋

光と風のおくりもの／ごっつあんです三浦暁子

キリストの足跡／異邦人への宣教百瀬文晃

山根基世

やまね・もとよ

ＮＨＫ退職後たちあげた、有限責任事業組合「ことばの杜」代表。著書『ことばで「私」を育てる』『「ことば」ほどおいしいものはない』ほか。

小山正見

おやま・まさみ

東京都公立学校教員を経て江東区立八名川小学校長を最後に退職。現在、江東区教育委員会学校支援課相談員。著書『どの子もできる10分間俳句』

〝ことばの杜〟への小道 Part Ⅱ

第４回

子どもの直感、発見、感動、発想、決断力を育てる俳句つくり

芭蕉ゆかりの地で始めた だれにでもできる俳句

山根　俳句の授業はいつごろから始められたのですか。

小山　授業として始めたのは四年ぐらい前です。

山根　なにかきっかけがおありで？

小山　友人に「アイデアマラソン」（ノートに毎日「発見」を書き続ける自己研鑽の方法）提唱者の樋口健夫氏がいまして、江東区の八名川小学校で俳句の授業を始めていたので、これとドッキングさせて、「十分間俳句」をするようになりました。

山根　先生がいらした八名川小学校は芭蕉のゆかりの地にありますね。

小山　芭蕉庵があったと言われる土地で学域の中に芭蕉記念館があります。俳句をするにはピッタリの環境です。

山根　八名川小学校では昔から多少は俳句を教えることになっていたのですか。

小山　私が校長として赴任したときには隣の深川小学校のほうが盛んでした。

山根　先生ご自身が俳句を授業で教えられたのですか。

小山　最初は四年生を対象に朝自習の時間に実験してみました。ノートを持たせて、とにかく昨日、発見したこと、気づいたこと、何でもいいから書け、と。それを五七五で書く。題も何もなくて。突然そうしたのですからなかなか書けない。三学期、毎日、やりました。相当乱暴なやり方でしたが、三分の二くらいの子どもが慣れていくうちに

書けるようになりました。そして一人四、五句を入れた句集を創りました。一回一回は大したことがないようでも積み重ねるとけっこうできる。これなら全校でできるかもしれないと思いました。

山根　それでいよいよ授業に取り入れようというのはどういうことで？

小山　校長定年の年だったのですが、教科の中心でもない俳句をすることになるので、先生方に賛同してもらえるか尋ねました。そうしたら、やっていい、ということだったので、再任用制度を利用して学校に残り、全校研究にしました。

山根　校長先生のままだから、できたのですね。

小山　そうでないとなかなか。給料は安くなりましたが（笑い）校長職は続けて。文科省の指定校、伝統文化のモデル校として二年間、俳句の授業研究を行いました。

山根　平成二十三年度から文科省の学習指導要領の中に、俳句創作が入ってきますが、それはもう読めていたのですか、時代の流れとして。

小山　結果としては、読めてましたね。（笑い）

山根　（笑い）すごい先見の明だと思ったのですが、お始めになった時点では。

小山　まったくないですね。（笑い）

山根　しかし、俳句でやっていくことが今の子どもたちには必要だ、と。

小山　文科省の指導要領では伝統文化の位置づけです。それもありますが、私は、二十一世紀に生きる力を育てる、という側面のほうが大きいと思います。俳句は十七音で物事の本質は何かをつかみ取ることですから、今の時代にピッタリという感じがあります。忙しい世の中で、短い言葉でもってつかみ取る。この力を鍛えることが、これからを生きる日本人にとって必要だという感覚のほうが強かったですね。

山根　俳句にはすごく教育力がある、と。どんな力を養えると思いますか？

小山　一つはひらめきです。直感。人生全体をかけて「これがいい、悪い」というのが直感だと思います。そのあと論理的に本当にいいかどうかを確かめる。将棋でも囲碁でも、たぶんこの手がいいと思って打ち、それから読みはじめる。コンピュータみたいにのべつまくなし読むわけではないですね。

山根　人生のターニングポイントでも直感力は、人間にとって大事なことですね。

小山　そういうことを鍛える場は学校教育の中にないんですよ。図工で何か描こうとするとき最初の十分は直感を働かせるけれど、後の四時間はずーっと作業になりますね。ところが俳句は一分で終わる。書いたらどんどん次の直感が求められる。直感力そのものをターゲットにしている教材はほかにはありません。例えば、十分間俳句で時間を区切ります。区切ることで集中できる。学校でやることに意味があります。家に帰ってはできませんね。集中して考える。皆と一緒だからできる。これは考える力です。そしてものをよく見る力。簡単に言うと、桜の俳句を作るときに、桜が咲く前に作ったときと、桜が咲いて見て作ったのでは全然違います。行事にしてもクリスマスの前と後では違う。リアルな体験を言葉にすることが大事です。「よく見れば　なずな花咲く　かきねかな」これは、芭蕉の句ですが、そういう発見力は、すべての教科の基になります。どの教科にも生きる。しかし今日の三年生の俳句に出てきた「四苦八苦」

山根　今、授業を見せていただいた扇橋小学校三年生の子どもたちですね。言葉をよく知っていましたよね、びっくりしました。

小山　言葉の感覚や雰囲気、「てにをは」の使い方がわかるようになるので、単に伝統文化を学ぶことではないのです。それに短い時間で手軽にいつでもどこでもできますし。

山根　先生にとってのメリットもあるみたいですね。

小山　クラス運営や添削、文集作りでの先生の負担は少なくなります。さらに学力差があまり出ないのです。

山根　それは面白いですね。

小山　直感力ですからね。ちょっと違った感覚なんでしょうね。

山根　成績とは別の価値観で見てもらえるのは、子どもにとってすごく幸せなことですよね。

小山　子ども同士の相互理解が大きいことも感じています。

山根　子ども同士がわかり合える。友達になれる、と？

小山　簡単に言えば、ええっ、あの子が作ったの？　という話です。

山根　あの子にこんな一面があるの、と。

小山　皆が褒めるでしょう、そして自分が褒め

られたことは心に残ります。

山根　今日の授業の雰囲気がとっても楽しそうでしたね。いきいきとして子どもたちが積極的に手を挙げて。ああいう授業作りは俳句ならではというところもあるのかしら。

小山　こんなことでいいんだ、とわかればできてきますよね。

山根　四年間、俳句を教えてこられて子どもたちの変化、手応えをお感じになっているところはありますか。

小山　言葉に対して敏感になることが大きいですね。それから皆ではありませんが、題材は自然が多いので、自然をよく見るようになる。「校長先生、菜の花が咲き始めました」と言いにきたりする子がいますから。おとなしくて、いつもは発言しないけれどもこころの中にはなにか持っているような子が、結構俳句つくり、好きですよね。

山根　なにか表現したいけれども、糸口が見つからなかった子の、糸口になっていくところがあるのでしょうね。

子どもたちの感動が伝わる教室に

小山　老人文学というのがありますね、老人にならないとわからないものが表現されている。逆に小学生でなければわからないこともあると思うのですが、小説という形で小学生は恐らく表現はできないですよね。でも俳句のような短い表現なら表現可能ですね。「ラジオ体操いつも同じ人に会う」と。（笑い）

山根　（笑い）本当ですよね。

私は定年退職した後、子どもたちが言葉の力がないゆえに、いろいろな残酷な事件を起こす。その状況をなんとかしたいという思いで、子どもの言葉を育てる活動を始めましたが、先生は教育の現場にいらして、子どもたちの変化をどのように見ていらっしゃいますか。

小山　表面的には確かに変わりました。ゲームがあったり、でも基本的には変わらないことのほうが大きいと感じています。

山根　二層化しているということもありますね。健全な地域社会が存続している場所では子どもたちも順調に育っている。

小山　学校という場は、ある意味、社会から遮断されています。そこでは、九歳なら九歳の子どもです。社会的背景をとりあえず切り離してみると、変わらないと言えると思っています。もちろん、不登校の子どもがいたり、いろんな問題は現れてきますけど。

山根　昔の子どもに比べて、言葉で表現するのがうまくなったのか、表現力が劣ってきたのか。そのへんの変化は特にお感じになってはいませんか。

小山　今日のクラスで、黒板に俳句を書くのに、なかなか出てこれなかった二人がいました。一人の子に、これがいいよ、と言いましたけど、黒板には書きたくなかった。ある意味で大人になっていますね。

山根　かなりリアルな自分の内面なんでしょうね、それは。

それにしても、小学校などでは担任の先生の力は、すごく大切ですね。

小山　ありがとうございます。しかし逆に言うと、子どもの力としての差は大したことではないとも言えます。要するに、担任が、ちょっとうまかったり、ちょっと一生懸命やったりすればできるようになり、やらなければ落ちる。ベーシックな部分のことではないと思います。

山根　先生たちの問題になってきますが、外からの雑務は多く、モンスターペアレンツも大勢いて、先生たちに時間がない、と聞きますが、現状はどうでしょうか？

小山　実感は四十年前に私が教師になったときと今と比べてみると、今の教師のほうが力量は圧倒的に高い。当時は社会的な力関係のなかで、子どもも言うことを聞かなくてはならない、と思っていた。今は教育活動がすごく緻密になっているにもかかわらず、ちょっと問題があると、大げさに取り上げられてかわいそうです。

山根　世の中自体、変ですね。国民がもう少し賢くならないと。

ところで、俳句を取り入れることで、どういう子どもが育つとお思いになりますか。

小山　ものが見えるようになることですね。考えて、しかも表現するときに断定します。こうなんだ、と言えるようになれば、決断力が出てくるでしょうし、表現力も出てくる。でも、実はそんなに偉そうなことを考えてやっているわけではないのですが。（笑い）

山根　子どもの言葉を育てる、と言うと、NHKさんぜひ美しい日本語を守ってください、と

おっしゃるのですが、私たちが育てたいのは「美しい日本語を守る」のではなく、自分の目でちゃんとものを見、自分の頭で考え、自分の言葉を語る子どもです。それは教育の一番大切なことですよね。今までの時代を振り返ると、危なかったのは、ものを考えないで上にたつ人の言うことについていくだけの人たちが大勢いたときですよね。

小山　五年生が詩を書くと、特にお勉強のできる子が、メルヘンチックな詩を書くことがよくあります。そういうものがよいと思っている。今日の三年生のクラス句会のときも「家族皆で幸せ」を皆がいいといった、ああいう状況になるのです。本当は、建前を抜け出たところに「詩」があるのですが……。

山根　今の子どもたちの有り様がよくわかりましたね。そこから先生たちがどういうふうに導いていかれるか、そこはすごく面白いところでもあります。あのような観念は、親たちや周囲から染められているんでしょうね。

小山　概念だけです。建前ですね。

山根　これから全小学校で俳句創作を授業で取り入れるとなると、心得がないと自信を失ってお困りになる先生もいらっしゃるのではないかと思うのですが、どうすればいいでしょう。

小山　それで『どの子もできる10分間俳句』（学事出版）を書いたのですが、学校俳句交流会を立ち上げて、去年の二月に第一回をやりました。そのときは学校俳句指導者交流会として三〜四十人くらいの参加でしたが、経験を蓄積して全国に発信しようと。

山根　それは例えば授業の方法をご覧になるのですか。

小山　いろんな方法がありますが、一つは、俳句について、俳句とはどういうものか、川柳とどう違うのか、基本的なことを学び、実際の教えた経験、授業のことを話してもらう。その次に句会をします。その句会は、自分たちの作った句でもいいし、クラスの子どもたちの句をもってきて、どう評価したらいいかを一緒に考えたりします。

山根　先生方が子どもたちの句をどう評価するかを勉強しあう……でも俳句を作れないと、この授業はできないか、というと。

小山　そんなことはないです。できれば子どもの気持ちもわかるのでいいのですが、全国の先生が俳人になれるわけではない。私は自分の目を信じろと言います。作文でもなんでも自分で評価していますね。俳句が形式ではなく、詩であり、感動が伝わってくるかどうか、共鳴するかしないか、が決定的に大事なのです。

山根　先生自身が自分の目を養い、自分の直感力を養っていく。先生を鍛える場にもなりますね。

小山　学級作りにも生きますし、どんな句でも褒めることができる。「元気でね　学校行くぞ　福はうち」という句がありましたが、今の世の中で、元気に起きて学校に行く、というのは貴重なことでしょう。

山根　（笑い）ほんとうですね。

小山　子どもの俳句は、どれもいやすばらしい、と言えます。いろいろな観点からも評価できる。実に面白いです。